

キリスト者と思い煩い

この世のものを宝とせず、神を宝として生きよ、神を神として信頼して生きよ、と教えられた主イエスは（6：19～24）、続いてこう弟子たちに語られた。「だから、言うておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切ではないか」（6：25）。そして、空の鳥、野の花をみよ、と群衆に語り、父なる神に信頼して生きるように教えられた。この主のお言葉は大変美しくまたきわめて印象的である。

ここで「思ひ悩む（口語訳“思ひ煩う”）」と訳されている語は「メリムナオー」で、いろいろな部分に分裂するという意味の言葉である。

思ひ煩いとは、人生のいろいろな出来事に直面して、心があれもこれもと分裂し、心配し悩む、そのような不安と悩みに乱れた心の状態をいう。私たちキリスト者の間においてさえも、仕事や生活上のさまざまな出来事の中で大小、多少の区別はあれ、このような思ひ煩いを経験しない人は少ない。

しかし主イエスは、この種の思ひ煩いが、突き詰めて行けば、神への信仰神への信頼と相容れないものであること、現在も将来も含めて、私たちの生と死の上に最終的な権威を持っておられるのは神であるということ、思ひ煩いは、この神のご主権に対する信頼の欠如から来るものであることを指摘された。そして創造主の御心にひたすらにゆだねて生きる「空の鳥」や「野の花」を例にとり、すべてのものの造り主であられ、またすべてのものの上に主権をもっておられる「父なる神」に信頼して生きるとことを信仰の本質として教えられた（25～34節）。

この主権者なる神への信頼は、旧約から新約を貫くキリスト教信仰の中心である。私たちの神は創造と摂理の神であり、イエス・キリストにおいて私たちの罪を贖い、「私の救い主」となり「私の父」となって下さった神である。この神が、日々の生活においても、私たちに必要なものを与える養い主であり、また守り手であり導き手であるということ、ここに福音のメッセージの持つ素晴らしさがある。

使徒パウロも、フィリピ教会の信徒たちへ、何ごとと思ひ煩うことなくむしろ、感謝をもってすべてのものを支配しておられる神に、「近くにいまし給う主によって」祈れ、と教えている（フィリピ4：4～7）。

また使徒ペトロも「だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には神はあなたを高めさせていただきます。だから、思ひ煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを心にかけていてくださるからです」と励ましている（第1ペトロ5：6～7）。

私たちも、このように、何ごとにおいても、イエス・キリストにおいて私たちの「父」となって下さった神をしっかり見つめ、その恵みのご主権に身をゆだねて信頼することを学びたいと思う。その時、人生のさまざまな境遇の中で――順境の時だけでなく、逆境の時にも――必要以上に思ひ煩うことなく、平安を与えられて対処することができるのである。

預言者イザヤも「主を信じる者は決してあわてることはない」と言っているとおりである（イザヤ28：16）。